

平成21年 5月 20日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2007 ～ 2008
 課題番号：19720136
 研究課題名 (和文) 英語でのスピーキングにおいて WTC の伸長を図る指導の効果
 研究課題名 (英文) Promoting WTC in EFL speaking instruction
 研究代表者
 磯田 貴道 (ISODA Takamichi)
 広島大学・外国語教育研究センター・准教授
 研究者番号：70397909

研究成果の概要：

英語で話すことに対する抵抗感を授業での取組で軽減できるのかどうかという点について検証するために、SPM (Sentences Per Minute) と呼ばれる指導方法を用いて実際に授業を行い、抵抗感を軽減できるのかどうか検証した。大学生を対象にした授業において SPM を取り入れ、3 週間にわたる指導を行った。その前後での抵抗感のデータを比較した結果、多くの学習者で抵抗感が軽減されており、指導の効果があったことが示された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	120,000	1,220,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育・WTC・動機づけ

1. 研究開始当初の背景

英語の授業において、学習者に何らかの発話を英語でするように求めると、たとえ簡単なことであってもなかなか言葉を発しないことがある。この原因には様々なことが考えられるが、主に英語で話すことに対して自信がなく、そのため抵抗感があって発話を妨げていると考えられる。授業内で何らかのスピーキング活動を行う場合、学習者が積極的に発話を行わなければ授業は成功しない。そのため、授業を効果的に進めるためには、抵抗感を軽減し積極的な活動を促す必要がある。

また、抵抗感を軽減することは、授業を効果的に進める手段として重要なだけでなく、学習者の長期的な学習を支える動機づけを高めることを目指す場合には、教授目標としても重要である。

2. 研究の目的

学習者のスピーキングに対する抵抗感を軽減することを目的のひとつとして指導を行い、その指導の前後で抵抗感が軽減されるのかどうか検討する。

3. 研究の方法

<予備調査：尺度の作成>

まず、抵抗感の測定に用いる尺度の開発を行った。測定を授業内で行うことを考えると、授業の妨害を避けるためにできるだけ項目数は少なくし、かつ信頼性と妥当性を備えた尺度を作成する必要がある。そのために本研究では、適合度を用いた尺度構成を行うこととした。

Willingness to Communicate の研究に基づき、英語を話す能力の評価が低いこと、英語を話すことに対する不安が高いこと、WTC が低下し英語で話したくないという気持ちから話すことを避けようとするものの3つの要因を測定対象とし、項目を作成した。それぞれの要因を、能力認知、不安、回避と呼ぶ。

予備調査を行い、確認的因子分析を用いて検証した結果、各要因につき3項目ずつを採択して尺度を作成した。回答ではこれらの項目に対し、当てはまる度合を7段階で答える（7：よく当てはまる～1：全く当てはまらない）。値が高いほど、抵抗感が強いことを表す（不安3は反転項目）。

表1 作成された尺度

項目名	項目
能力1	私が話す英語は、相手に意味が伝わらないと思います
不安1	私は、人と英語で話す時、緊張します
回避1	私は、できれば人と英語で話したくありません
能力2	私は、今の英語力では英語で話すことはできないと思います
不安2	私は、人と英語で話す時、どきどきします
回避2	私は、人と英語で話すことは避けたいです
能力3	私は、英語で話して、自分が考えていることを相手に伝えることができないと思います
不安3	私は、人と英語で話す時、リラックスしていません
回避3	私は、英語で話さなければならない時は、できるだけしゃべらないようにしたいです

<本調査>

予備調査の次年度に本調査を行った。抵抗感を軽減することを目的のひとつとして、SPM と呼ばれる指導法を取り入れた。この指導法は話すことの流暢さを高めることを主目的としているが、この活動は学習者に英語を話すことへの自信をつけ抵抗感を軽減させる効果があると考え、この指導方法を対象

の授業で採用することとした。

SPM の基本的な手順は次の通りである。

- ①学習者は向かい合って2列に並びペアになる。指示がしやすいように列に名前をつける（ここでは1番、2番とする。他の名前でも良い）。
- ②教授者は、話すテーマを伝える。
- ③1番が決められたテーマについて、30秒間英語で話す。時間は教授者が測る。その間、2番は1番が発した文の数を数える。
- ④30秒たったら話をやめる。2番は1番に文の数を伝える。
- ⑤1番と2番が役割交代し、2番が30秒間話し、1番が文数を数える。30秒たったら止め、1番は2番に文数を伝える。
- ⑥どちらかの列が隣にひとり分移動して、ペアを変える。
- ⑦同じテーマで③～⑥を数回繰り返す。その際、「前の回の文の数プラス1」を指すように指示する。

対象の授業は大学1年生を対象とした必修の英語の授業で、週1回（90分）行われた。調査対象となったクラスは4クラスで、103名が分析対象となった。履修者の専攻は生物学、法学、教育学、看護学など多岐にわたるが、分析対象となった学習者の中には、英語に関する分野を専攻する者はいない。また、対象者の英語力は決して高いとは言えないという印象であった。授業内での彼らの発話を観察すると、基本的な文法や語彙を使って文を作ることに困難を感じる者が多かった。彼らは調査期間後に大学が実施するTOEIC IPテストを受験しているが、その時のスコアはほとんどが300点台から400点台であった。

3週間にわたる指導の前後で、抵抗感のデータ収集を行った。分析では、まず平均値の水準での変化を調べるために、対応のあるt検定を行った。あわせて、個人の水準で変化があるのかどうか検討するために、個人ごとの値の変化を検討した。また、個人内個人差に着目し、クラスター分析を用いて学習者の特徴が第1時点から第2時点へかけてどのように変化したか調べた。（値が低いほど抵抗感は低いことを意味する）

表2 各時点での平均値とt検定の結果

	平均	標準偏差	t(102)	p
能力認知	5.14	1.27	6.74	.00
	4.59	1.23		
不安	5.73	1.17	5.58	.00
	5.30	1.19		
回避	4.46	1.70	2.91	.00
	4.20	1.53		

（上段が第1時点、下段が第2時点）

平均値の変化を吟味したところ、表2に示すように、第2時点へかけて低下していることが分かる。対応のあるt検定の結果、差はいずれも5%水準で有意であった。

続いて、個人ごとの変化について考察するために、第1時点の値をベースラインとして、第2時点の値がどう変化したか調べた。第2時点の値が第1時点よりも低ければ軽減されたと解釈し、逆に第2時点のほうが第1時点よりも高ければ上昇したと解釈した。両時点で値が同じ場合は変化しなかったと解釈した。その結果が表3である。

表3 個人の変化

	軽減	上昇	変化なし	計
能力認知	76 (73.79%)	19 (18.45%)	8 (7.77%)	103
不安	63 (61.17%)	19 (18.45%)	21 (20.39%)	103
回避	58 (56.31%)	32 (31.07%)	13 (12.62%)	103

続いて、三要因の個人内個人差に着目し、クラスター分析を用いて3つの値の高低のパターンにより対象者の分類を行い、どのような特徴の学習者がどのような変化をしたのか記述した。

第1, 第2時点における3つの要因の尺度得点を標準化した後、平方ユークリッド距離を用いたウォード法によるクラスター分析に投入した。結合距離の変化、および得られるクラスターの特徴を吟味して、6クラスターに分類するのが適切と判断した。

それぞれのクラスターにおける各要因の平均値をプロットしたものが図1から図6である。

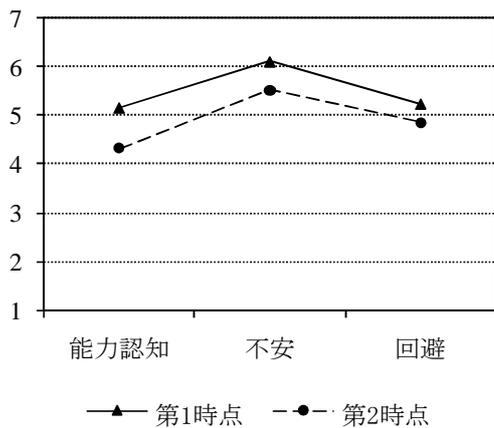


図1 第1クラスター

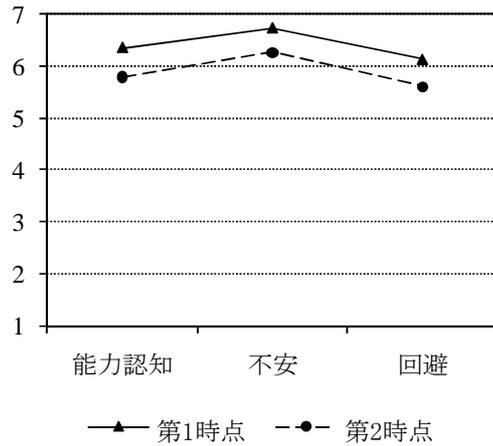


図2 第2クラスター

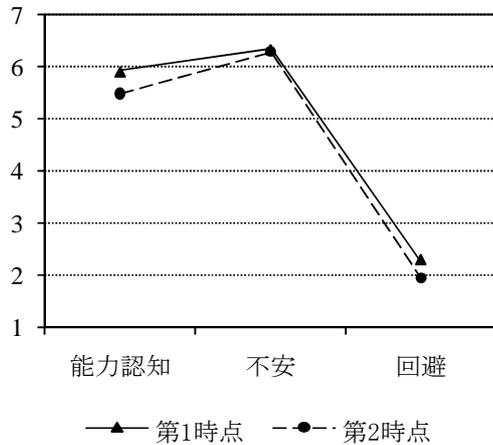


図3 第3クラスター

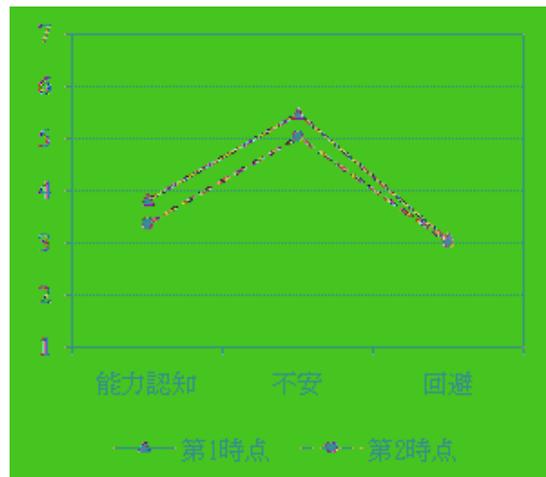


図4 第4クラスター

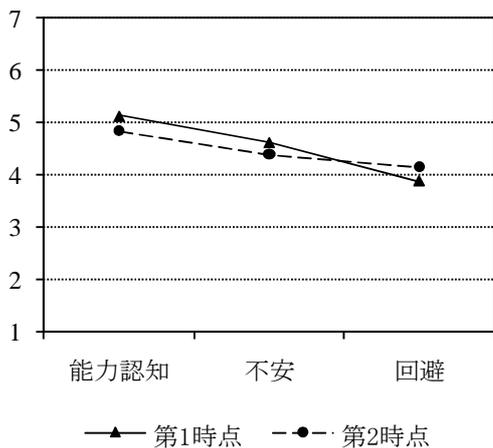


図5 第5クラスター

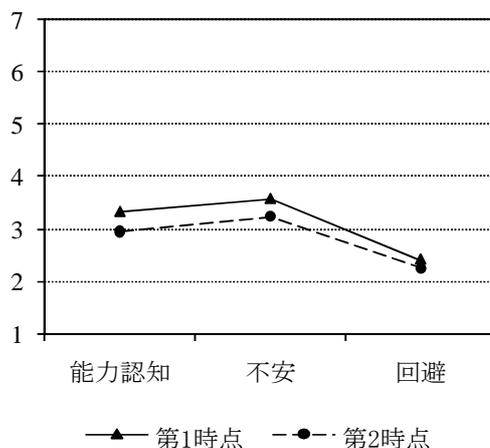


図6 第6クラスター

図1から図6を見ると、当初抵抗感の強かったグループ（特に第1クラスター1、第2クラスター）で軽減がおこっているだけでなく、中程度のグループや、抵抗感がほとんどないと考えられるグループでも肯定的な変化が起こっていると考えられる。

4. 研究の成果

抵抗感の得点の平均値が、第1時点から第2時点へかけて低下しており、 t 検定の結果その差は有意であった。したがって、全体傾向として抵抗感が軽減したと言える。また、表3に示されるように、個人ごとの変化を検討すると、全員ではないが多くの学習者で軽減が見られた。以上の結果から、全体的に見て抵抗感が軽減されたと言える。

クラスター分析の結果で特に授業の効果として重要なのは、第1クラスターや第2クラスターに見られたような、3つの要因とも値が高く、抵抗感が強かった者で軽減されていることである。また、第3クラスター、第4クラスターのように、一部の要因のみで値が高いケースも見られたが、そのような場合

でも軽減が起こっていた。さらには、第5クラスター、第6クラスターのように、もともと抵抗感があまりないケースや、抵抗感がなく自信も積極性もあるケースも見られたが、そのような学習者の中でも軽減が起こっていることが見られた。このような結果から、もともとの抵抗感が強い場合でも弱い場合でも、今回の指導の効果が見られたと言えよう。

また、この効果が比較的短期間に起こったことも注目し値する。調査期間は授業3回分であったが、このような短期間で抵抗感の軽減が見られたことは、授業実践の成果として重要であると考えられる。特に大学での英語の授業は週に1回ないし2回と少なく、全授業回数は1 Semesterで十数回程度である。そのような短期間で教育効果を挙げることは非常に難しいが、今回の調査のように数回の授業で肯定的な変化が見られたことは、授業実践の上で意義深いと考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①磯田貴道（2009）「英語でのスピーキングに対する抵抗感の軽減」 JACET Journal, 48, 53-66. 査読有
（発行：大学英語教育学会）

②磯田貴道（2008）「英語スピーキング抵抗感尺度の作成」『広島外国語教育研究』11, 41-49. 査読無
（発行：広島大学外国語教育研究センター）

〔学会発表〕（計1件）

①磯田貴道 「英語でのスピーキングに対する抵抗感の軽減」 第34回全国英語教育学会東京研究大会（2008年8月9日 昭和女子大学）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

磯田 貴道（ISODA TAKAMICHI）
広島大学・外国語教育研究センター・准教授
研究者番号：70397909

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者